

第 6 章 資料報告

第1節 沢東A遺跡から出土した動物遺体

植月学

はじめに

本稿では平成3年度に行われた富士市沢東A遺跡の第1次発掘調査において出土した動物遺体について報告する。資料の年代は古墳時代から平安初期に属する。

1 資料と方法

本調査では 5 世紀後半から 9 世紀初頭にかけての堅穴建物跡 27 軒などが検出されている（若林・佐藤 2014）。動物遺体は 5 遺構から出土しており、取り上げの単位は 9 点あった。このうち 7 点が部位の同定可能な標本を含んでいた（第 226 図）。

点数が少ないため、すべての部位を同定対象とした。同定は現生標本との比較によりおこなった。

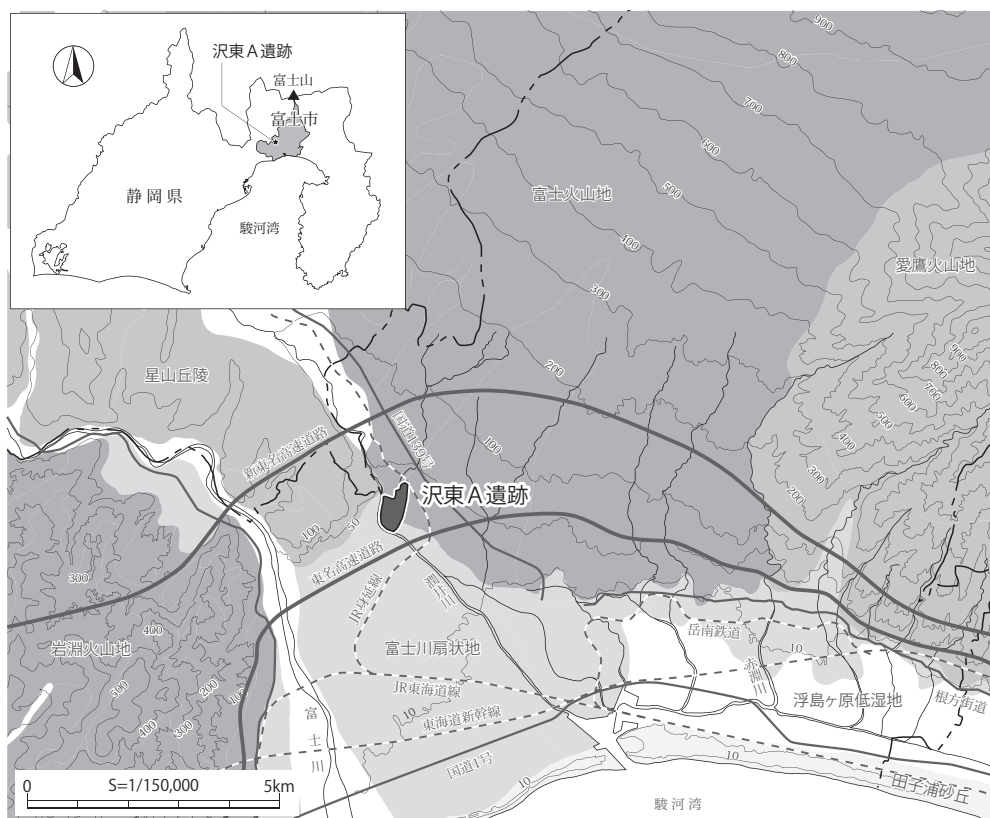
2 分析結果

第 26 表に部位の同定に至らなかった標本も含め、すべての資料の同定結果を示す。同定できた標本の画像は第 226 図に示す。部位不明の標本も質感から哺乳類と推測された。すべての標本は被熱し変色している。

以下の4種が同定された。

イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
ニホンカモシカ	<i>Capricornis crispus</i>
ウシ	<i>Bos taurus</i>

以下では部位が同定できた標本について遺構ごとに年代順で記載する。出土遺構の位置は第 224 図に示す。No. は動物遺体用に付した整理番号である。今回の調査ではニホンジカとニホンカモシカが含まれていたため、両者を区別した基準について特にや



第 222 図 静岡県富士市 沢東 A 遺跡の位置

や詳しく述べておく。区別のポイントについては第226図にも矢印で示した。

SB27 (5世紀後半)

No.9 ウシ 第2/3 後臼歯 (右)。

前葉の舌側と小窩 (歯ロート) の2破片である。舌側近心の溝が歯根方向に長く伸びるため第1後臼歯ではないと判断した。また近心の舌側への折り返しが強いので第2よりも第3の可能性が高いと推測される。

部分的な標本ではあるが、Grant (1982) の咬耗ステージに当てはめると小窩が独立しており f 以上に比定できる。

なお、本資料自体には登録番号や層位の情報は付随していなかった。しかし、遺物台帳には以下の記録があったという (藤村翔氏のご教示による)。

番号 : 371

取り上げ日 : H3.8.27

遺構名 : SB27

種類 : 須恵器、土師器、動物骨

SB27 関連遺物には他に骨の記述は見られないとのことなので、本標本が該当する可能性が高い。層位に関する情報は無いが、8.18 までには覆土の掘削

を開始しており、8.28 から床面の遺物集中箇所を取り上げている。8.27 であれば覆土内でも床面にかなり近づいた位置からの出土とみてよいとのことである。また、本遺構の床面一括資料は5世紀後半に属するものの、一部6世紀末～7世紀前半頃の混入遺物も含まれるため、下限は7世紀前半まで下る可能性も排除できないとのことであった (第225図)。

したがって、ウシ歯の年代としては5世紀後半の可能性が高いが、7世紀前半まで下る可能性も残る。

SB01 (6世紀後半～7世紀前半)

No.1 ニホンジカ 中節骨、近位端。掘り方より出土。

近位端の底側中心が小さく窪む点はニホンジカに特徴的で、ニホンカモシカでは平坦、ないし膨らむ。

SB10 (6世紀後半～7世紀前葉)

No.3 部位不明の哺乳類の焼骨片が少量出土したのみである。カマド灰層出土。

SB05 (8世紀)

No.2 ニホンジカ 基節骨、近位端～中間。カマドより出土。



第223図 沢東A遺跡 周辺遺跡分布図

近位端の底側中心に小さな窪みが見られる。また、近位端中心の溝内側は垂直に立ち上がる。以上はニホンジカの特徴で、ニホンカモシカでは窪みはなく、溝内側はより緩やかに立ち上がる。

SB13 (7世紀後半～8世紀前半)

No.4 ニホンジカ 下顎第3後臼歯 (左)。覆土より出土。

前葉と中葉のエナメル質で、それぞれ頬側、中心、舌側に分離しているが同一標本と推測される。エナメル質の小片を他にも複数伴うが同定できない。

前葉頬側には柱状の小突起があり、舌側の近心下端には弱い襞が見られる。これらは現生ニホンジカ標本には見られたが、ニホンカモシカ標本では確認できなかった。

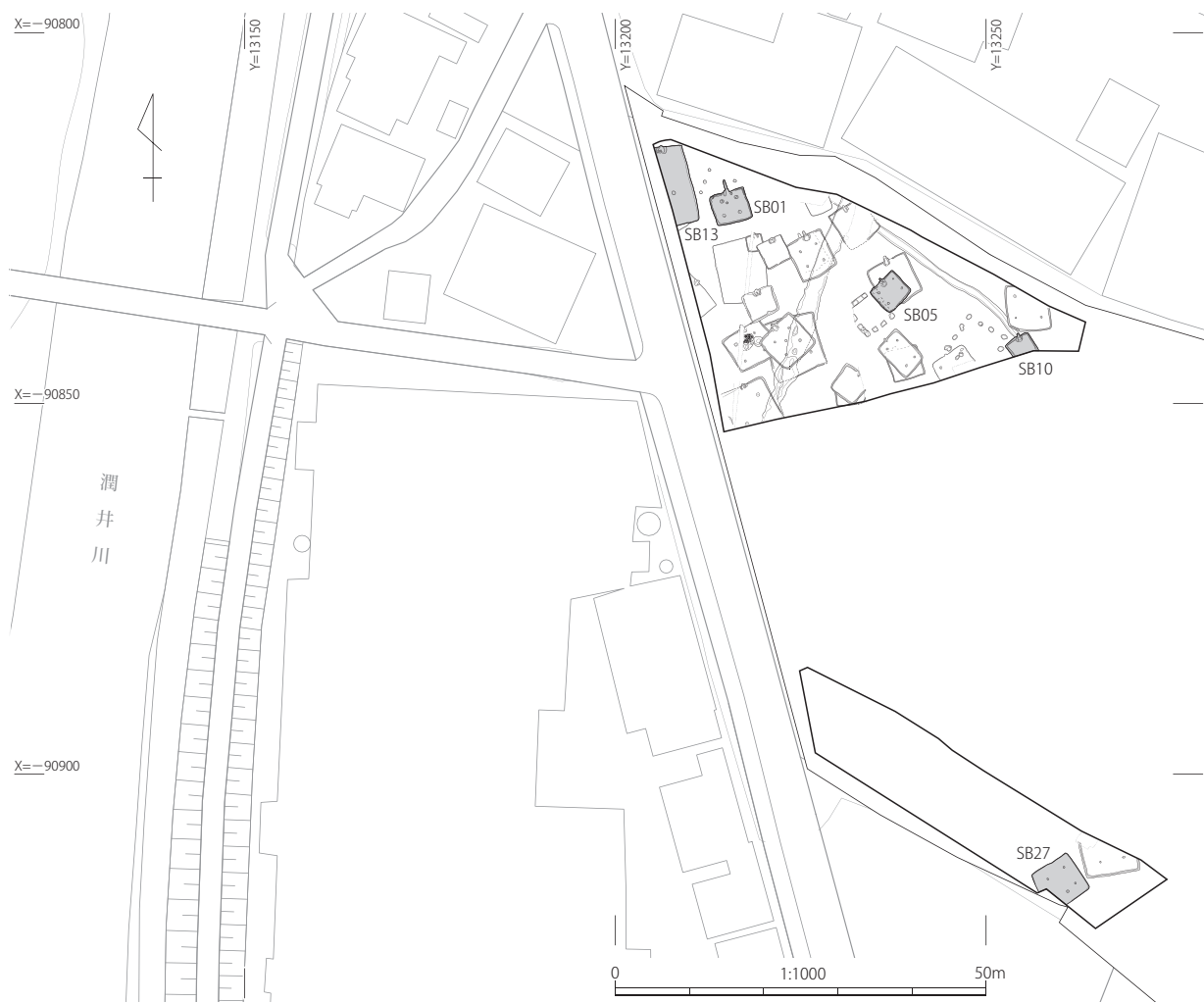
No.5 ニホンカモシカ 橈骨 (右) 遠位端。覆土より出土。

橈側手根骨との関節面は全体に浅いが (第226図①)、前側のみ強く窪む。後面の橈側・中間手根骨との関節面はいずれも深く窪む (②)。中間手根骨との関節面の前側は稜線が強く張り出す (③)。以上はニホンカモシカ標本と一致する。ニホンジカでは①は全体により深くえぐれる一方で、前側の窪みは見られない。②の窪みは顕著でない。③の張り出しもカモシカほど顕著でなく、外側に向かってなだらかに下がっていく。

No.6 部位不明の哺乳類の焼骨片のみ。覆土より出土。

No.7 イノシシ 第3手根骨 (左)。下端を欠き、縁辺も摩耗する。カマドより出土。

No.8 ニホンジカ/ニホンカモシカ 尺骨 (右) 近位端。肘突起と滑車切痕部分だが、小片のため種の同定に至らなかった。



第224図 沢東A遺跡第1次調査地点 動物遺体出土遺構位置図

3 考察

出土した動物遺体はすべて白色～灰色に変色した焼骨であった。本遺跡における動物遺体の残存はカマド内に混入、もしくは意図的に燃やされたなどの偶然的要因に左右されたことを想起させる。したがって解釈に当たってはこのようなバイアスを考慮する必要がある。

出土点数はごく少ないが、各時期にわたって出土していることは本遺跡において一貫して動物資源利用が行われていたことを示唆する。同定できたのはいずれも陸獣であり、駿河湾まで10km未満の立地にありながら海産物利用の証拠は捉えられなかった。この点は利用が行われなかったことを直ちに示す訳ではなく、上述のような遺存条件のバイアスに加え、篩別など回収方法のバイアスも考慮する必要がある。たとえば、神奈川県三ツ俣遺跡では古墳時代から平安時代のかまど覆土を集中的にサンプリングし、水洗選別にかけること、微小な焼魚骨片を多数回収することに成功している（小林ほか1991）。本遺跡の動物遺体はいずれも小片とはいえ、発掘調査時に肉眼で確認できる程度の大きさである。より微細な魚骨片などが元々含まれていなかったのか、含まれていたが回収されなかったのかは判断ができない。

陸獣はウシ1点を除き野生獣であった。シカは同定可能な標本を出土した4遺構中3遺構で確認されており、本遺跡で利用された主要種であった可能性がある。

SB13で確認されたカモシカは山岳地帯や洞窟遺跡での出土が一般的な種であり、本遺跡のような低平な地域での出土は珍しい。鳥居春己の報告（注）によれば明治以前の静岡県域における本種の分布は山梨県境に近い天子山地や身延山地、さらにその奥の赤石山脈に限定される。本遺跡からは最短でも20km以上の距離がある。1点のみの出土だが、当時の生業圏あるいは物流を考える上で興味深い資料である。

他にイノシシ1点が出土した。これら野生獣の用途としては食用の他に、特にシカの場合には皮革や角が様々な加工品の素材として用いられた可能性も考えられる。

本遺跡で特筆すべき点はウシの出土である。1点のみながら、5世紀後半の遺構から出土している。筆者が以前東国の遺跡について集成を行なった際



第225図 沢東A遺跡第1次調査地点SB27 遺物出土状況図

には、埼玉県城北遺跡の6世紀第2四半期（宮崎1995）や群馬県三ツ寺I遺跡の6世紀中頃（宮崎1988）が古い例であった（植月2011）。悉皆的な集成ではなかったため、より古いウシ遺体の存在は否定できないが、本遺跡の成果は駿河におけるウシの導入が東国と比較して早かった可能性を示唆する。ただし、先述のように出土状況が不明なことから7世紀まで下る可能性もあり、年代に関しては決め手を欠く。藤村（2018）によれば本遺跡では本地点を含め5箇所以上で牛骨・牛歯が出土しているとされ、飛鳥I期頃までにはウシの利用が普及していたと推測される。この点は隣接する山梨県域でウシの出土が百々遺跡の9世紀の例以前には確認できていない点とは対照的である。生産規模を論じるにはまだ資料が不足しているが、藤村が指摘するように富士山南麓における牧経営の特質を考える上で今後検討すべき課題と言えよう。

おわりに

今回報告した資料は数量としてはわずかであったが、複数の種を含み、遺跡立地にはそぐわないカモシカの出土や、本地域へのウシの導入年代に関する手がかりなど貴重な知見を得ることができた。すべてが焼骨であったことから、動物遺体の残存には強いバイアスが働いていると予測され、動物資源利用の全体像を復元するまでには至らない。しかし、こうした分析事例を着実に積み重ねることで動物資源利用の地域性や変遷の理解につながっていくと期待される。

第26表 同定結果一覧

地区	遺構	層位	整理番号	No.	日付	種	部位	左右	位置	数	重量 g	備考
I	SB01	掘り方	1	-	H3.9.11	ニホンジカ	中節骨	?	近位端	1	0.9	
				-	H3.9.11	哺乳類	?	?	?	1	0.4	
	SB05	カマド	2	R388	-	ニホンジカ	基節骨	?	近位端～中	1	3.0	
	SB10	カマド灰中	3	R585	H3.7.25	哺乳類	?	?	?	+	0.6	別に灰サンプルあり
	SB13	覆土	4	R466	H3.9.6	ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	前～中葉	1	1.1	6分割。他に臼歯小片あり。同一標本か不明。
			5	R469	H3.9.9	ニホンカモシカ	橈骨	右	遠位端	1	5.4	
				R469	H3.9.9	哺乳類	?	?	?	+	3.8	
		カマド	6	R478	H3.9.9	哺乳類	?	?	?	4	0.5	
			7	R502	H3.9.12	イノシシ	第3手根骨	左	ほぼ完存	1	0.7	
				R502	H3.9.12	哺乳類	?	?	?	+	0.7	他に軽石1点
		-	8	-	-	ニホンジカ / ニホンカモシカ	尺骨	右	近位端	1	1.6	
II	SB27	-	9	-	-	ウシ	下顎第2/3後臼歯	右	舌側、中心エナメル質（歯ロート）	+	3.6	舌側残存高:39.1mm。

末筆ながら丹念な資料回収努力を怠らなかった調査担当者の方に敬意を表するとともに、貴重な分析の機会を与えていただいた富士市教育委員会、および種々ご教示いただいた藤村翔氏に深く感謝申し上げます。

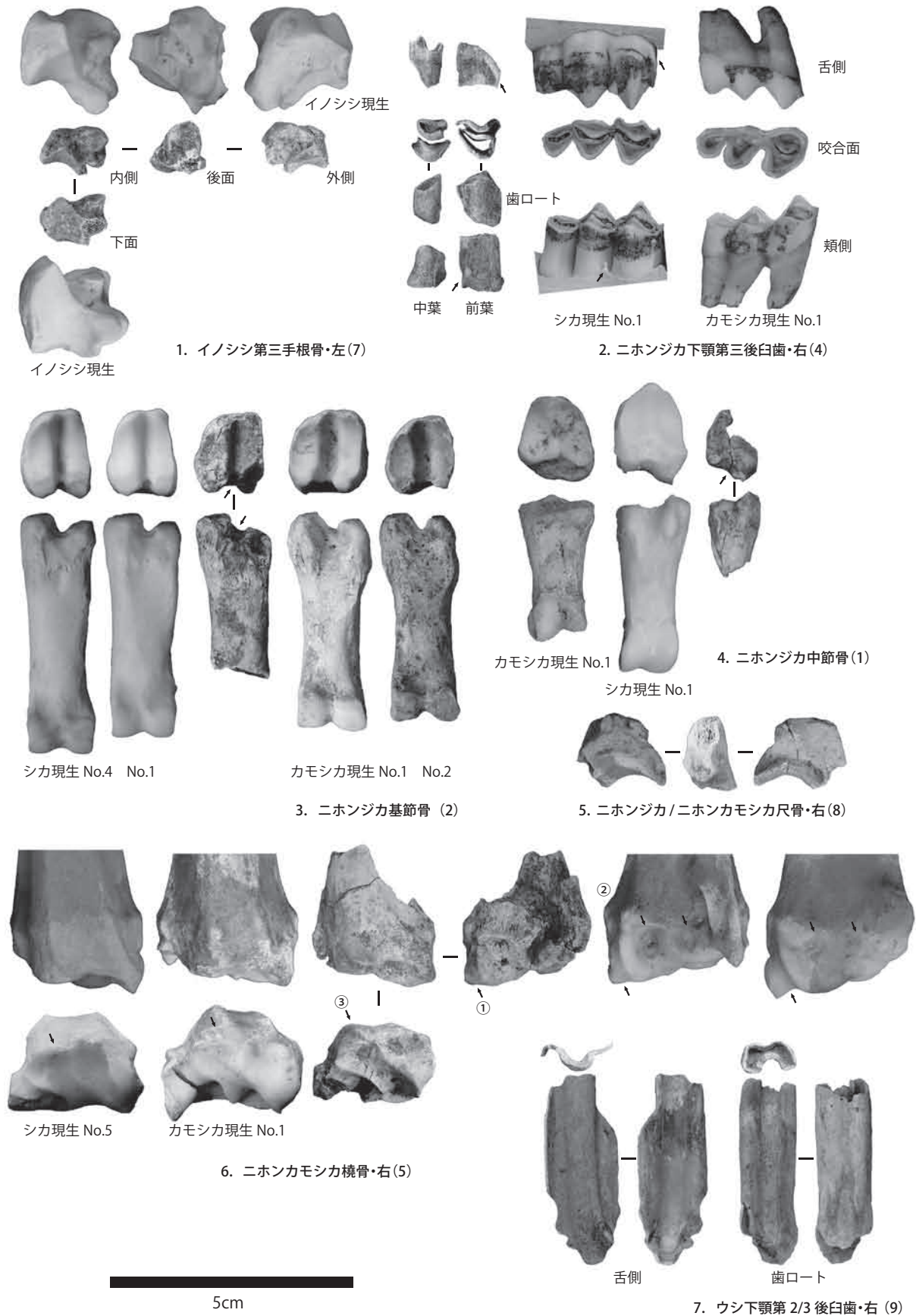
注

静岡県（2017）に引用された以下の文献によるが、入手できていない。

鳥居 春己 1978「静岡県におけるサル、クマ、イノシシ、ニホンジカ、カモシカの分布と被害の現況」『静岡県林業試験場研究調査資料』21

引用文献

- 植月 学 2011「動物考古学からさぐる古代の牛」『帝京大学山梨文化財研究所報』53
- 小林 公治・吉川 純子・樋泉 岳二 1991「三ツ俣遺跡出土の動植物遺体とその考古学的コンテクスト」『神奈川考古』27
- 静岡県 2017『第二種特定鳥獣管理計画(カモシカ)(第5期)』
- 藤村 翔 2018「富士山・愛鷹山南麓の古墳群の形成と地域社会の展開」『境界の考古学 日本考古学協会 2018年度静岡大会研究発表資料集』日本考古学協会 2018年度静岡大会実行委員会
- 宮崎 重雄 1988「三ツ寺I遺跡出土の獣骨類について」『三ツ寺I遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎 重雄 1995「城北遺跡の獣骨類」『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 若林 美希（編）・佐藤 祐樹 2014『沢東A遺跡第1次 遊技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市埋蔵文化財調査報告 第56集 富士市教育委員会



カッコ内は整理番号。比較のために一部現生標本を示した。矢印は同定のポイントを示す。

第 226 図 沢東 A 遺跡第 1 次調査地点出土動物遺体